

現実を見据えた金融・財政家

第一生命経済研究所 松元 崇

高橋是清は、昭和3年に大阪毎日新聞の金解禁に対するインタビューに答えて「その用意と自信とさえ出来ておれば、一刻も早く解禁を断行すべし」然るに「断行当時および断行後、国際貸借が均衡を得るように出来上がっておるか、また近き将来に十分に均衡しうるように出来上がっておるか」としていた。この高橋の答えぶりは、国内均衡（経済成長）のために対外均衡（国際収支）の条件が「現実」にあるかを問題にしており、高橋が「現実」を見据えた金融・財政家だったことを示している。

高橋のそのような政策姿勢の原点は、明治10年代に農商務省で前田正名という「現実」を重視する人物に出会い、日本の地域そして国全体の発展のためには低利の資金が必要だということを教え込まれたことにある。その高橋は、明治30年の金本位制導入時に、松方正義蔵相にそれまでのレートを半分にして金本位制を導入すべきことを進言した。それはわが国の経済成長のために外資導入が必要で、そのためには金本位制が望ましいが、それは経済実態にあったものでなければならないとの考えによるものであった。

その金本位制の下に、日本は順調に成長した。ところが、第1次世界大戦中に、日本は金本位制を離脱。その後、関東大震災などもあって、経済が不安定になる中、早期に金本位制に戻ろうとの議論が出てきたところで行われたのが冒頭昭和3年の発言。

それに対して、とにかく金解禁して為替を安定させて貿易振興を図るのが何よりも日本経済の成長につながると思ったのが昭和4年に蔵相になって、旧平価で金解禁を断行した井上準之助の考えで、当時の経済界も大方それを支持した。それは、金本位制で、明治以来の日本が順調に成長してきたことが、もはやイデオロギーになっていたということ。それは、イデオロギーで「現実」が見えなくなってしまう姿。井上デフレで日本は不況のどん底に落ち込み、青年将校が世直しを声高に叫ぶ世界になっていった。

井上デフレを克服した後の高橋財政は、高橋が前田から教わった低金利政策を行ったのが基本。高橋財政というと積極財政が有名だが、財政は井上が無理なデフレ財政で切り詰めていたのを井上デフレの前に戻した程度。為替切り下げ、低金利、井上のデフレ財政の廃止により景気は急速に回復した。その高橋財政の時代は、戦前で最も経済が順調だったと言われている。そして、景気回復後には、緊縮財政路線をとったため、当時は健全財政の時代と呼ばれていた。

そして、景気の回復もあって赤字公債の消化難から金利上昇の気配が出てくると、高橋は、公債発行額漸減のために不退転の決意で緊縮路線の予算の中で唯一膨張傾向にあった軍事費を抑制すべく軍部と激しく衝突した。結果が、2.26事件での暗殺であった。

一般の人（財政や金融の専門家にも）に見えない経済の現実を直視し、臨機応変に財政・金融面からの成長政策を実現しようとしたのが高橋是清であった。